宮古工業高等学校　校報

山ぼうし

第３０号　平成１９年　９月３０日

山ぼうしは「立志の樹」といわれ、本校正門脇に植樹されており、

花も実も　蒼天に立つ　山ぼうし

の碑（初代 PTA 会長盛合聡の揮毫）がある。

教　育　の　道

校長　兼　平　栄　補

９月第２週に地区ＰＴＡを９地区で開催した。残念ながら保護者の方々の参加は低調であったように思う。しかし、夫婦で参加していただき出席率が１００％を超えた地区もあった。その地区のように夫婦が協力して仕事をしながら、たくましい親の姿を子供達に示すことは、家庭教育の原点ではないだろうか。私自身の子育ても顧みながら改めて家庭教育について考える機会となった。

ところで、「親学」を論じた教育再生会議は、安倍前首相の突然の辞任により主を失ってしまった。「親学」の提言には批判も多かったが、教育の原点は家庭にあり、親は人生最初の教師として、教育の第一義的責任を負うということに異論は無いと思う。

しかし、子供達を取り巻く家庭環境は変化している。

まず第一に、家族が小さくなったことである。今や子供の居る世帯は四分の一しかなく、一人世帯、二人世帯が五割を超えている。さらに雇用労働者の父親は家庭の外で専ら過ごしており、子供と過ごす時間が著しく少ない。モノの面では豊かになってきたが、ヒトの面では貧しさの一途をたどっているといってよい。大勢の家族と生活しながら、性や年齢、立場の異なる様々な人と接することで、子供は情緒や言語や社会性などを発達させて行くことが出来るのである。母親以外に接する人がいない家族の中では、子供はコミュニケーションの能力や人と接する能力を育てることが困難になる。

第二に、雇用労働者家族が急速に増え、仕事場は家庭の外となったことである。子供たちは家庭の中では親の仕事を手伝うこともなく、仕事から疲れて帰ってきて、休息する親の姿を見るだけとなった。親の仕事をする姿を見ることもないので、子供達は父親の仕事を通してその権威を感じることが出来なくなった。便利な商品が家庭に浸透し、家で行わなければならない家事労働も減少の一途をたどっている。子供は家庭で手伝いや家事労働をすることもない。仕事の苦労や喜びを体験することもないから、職業への意欲も持ちにくいのである。

このような状況下、家庭の教育機能を強める方策としてどのようにすればよいと言われているのだろうか。

まず第一に、温もりある夫婦（家庭）の姿が重要である。子供が人間らしく成長するには情緒の安定は欠かせない。子供にとってのよりどころである親（家庭）が不安定では、子供の感情も不安定になる。第二に、父親の子育て参加である。父親と母親とは子育てにおける役割が異なり、成長段階それぞれにおいて父親の役割があることを認識しなければならない。家族を守り努力している父親の姿は子供にとって何よりの手本である。子供は親の背中を見て育つと言われるが、親の生き様を見ているのである。

我が国では古くから子育ての知恵が受け継がれてきた。「教育の道は家庭の教えで芽を出し、学校の教えで花が咲き、世間の教えで実がなる」「しっかり抱いて、下に降ろして、歩かせる」という子育ての知恵を見直したいものだ。

１０月行事予定

１０月　４日（木）	薬物乱用防止教室（１年）
１０月　６日（土）	同窓会総会
１０月１０日（水）～１２日（金）	インターンシップ
１０月１２日（金）	県ロボット競技会
１０月１８日（木）	生徒会役員選挙
１０月２７日（土）～２８日（日）	工業祭

○新任職員紹介

名　前　：　佐々木　里　美
出身地　：　山田町豊間根
大　学　：　東京家政大学（宮古高校）
年　齢　：　２６才
趣　味　：　料理（お菓子作り）

いつも元気で優しい工業生のおかげで毎日楽しく過ごしています。精一杯頑張りますのでよろしくお願いします。

就職活動本格化

《就職希望者の内訳》

管内	４１名
県内	９名
県外	３３名
その他（公務員等）	４名
計	８７名

※卒業予定者123名

１０月を迎え、ただ今３年生は就職活動の真っ最中です。既に内定通知を受け取り、胸を撫で下ろしている生徒もいる状況ですが、まだまだ校内は３年生たちの放つ緊張感で満ちているように思えます。同様に３年生担任をはじめとする職員も、一つ週末を越えるごとに期待と不安で身の細る思いでおります。

地区ＰＴＡで一部の保護者の皆様にはお伝えしたところですが、今年の求人状況としては、管内就職に関しては求人社数はほぼ例年同様ながら、今後の景気に対する警戒感か、１社あたりの求人数が減少しております。一方、本校を指定で求人を出していただける企業も引き続きあり、本校に対する地元企業の期待を感じると共に、卒業生たちの活躍のおかげとも考えております。また、就職支援相談員の佐藤勝之氏、昨年度の相談員で現宮古市産業支援センターの伊藤氏には地元企業と生徒とのパイプ役をしていただいております。

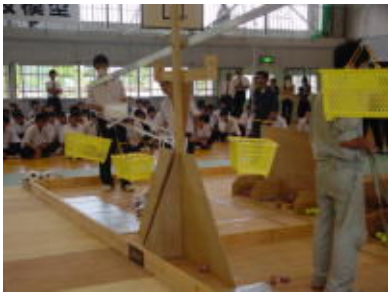
一方、例年に引き続き県外就職に関しては昨年をさらに上回る数の企業から求人票を頂きました。今年の特徴としては、名古屋東海地区の企業からの求人です。実際、本校まで企業の人事担当者が来られて話をうかがいましたが、名古屋では完全に売り手市場でとのことでした。これとは対照的に、有効求人倍率が１倍を下回る本県では依然として県内就職が厳しい状況です。

今後全員の進路が決定するまでは就職戦線は続いていきます。現在のところ、企業の人事担当者にうかがうところでは、本校の生徒は面接での自己表現と、いわゆる一般常識のペーパーテストが弱点になっているとのことでした。もちろん生徒一人ひとりの長所短所は異なりますが、私たちも企業の皆様の声に耳を謙虚に傾けながら、生徒たちの進路指導に当たって参りたいと存じます。先月行った地元青年商工会議所の協力による模擬面接（左の写真）から始まった本格的な就職活動、９月中旬から現在までで約６０名の生徒の進路が決定しております。（進路指導部）

第７回校内ロボット大会

平成１９年度第７回校内ロボット競技大会が９月２７日（木）、赤前小学校と津軽石中学校の児童生徒と引率の先生方、６７名を招待して本校第一体育館で開催されました。大会には機械科から４台、電気科から２台、電子機械科から２台、設備工業科から１台の合計８台がエントリーし、それぞれアイデアを出し合って作り上げたロボットを操作し、競技に取り組みました。

競技規定は高さ９０㎝、横と奥行き６０㎝以内、重量は１５㎏以内と決められており、競技ルールは、制限時間内にコート内の棚に置かれた大きい缶詰１２個、小さい缶詰４８個、テニスボール２０個を取り込み、天秤に吊ったカゴに入れ、その点数を競うものです。ロボットが棚から缶詰を取ったり、カゴに入った時は、会場から大きな拍手が起こりました。トーナメント方式で行われたこの大会で優勝したのは電気科のロボット「無限（インフィニティ）」で、準優勝は機械科の「ＪＦＫ」でした。



製作は夏休みを返上したり、放課後遅くまで残っての作業だったようです。この大会でいい結果を残せたチームもそうでないチームも、次の目標である県大会へ向けて現在も改良に余念がありません。県大会は１０月１３日（土）に一関市総合体育館で開催されます。本校の８台すべてが県大会に参加し、１１月に沖縄で行われる全国大会を目指します。本校のロボットの活躍にご期待下さい。